

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 5月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



この画像、大阪の少し北、吹田の万博公園。最近流行のネモフィラって花が満開だと聞き、仕事の合間の日が好天だったので奥さんと二人でデートして来た。目当てのその花もさることながらチューリップもいっぱい咲いていた。一昨年、わざわざアルステルダムまでチューリップを観に行ったのに、すっかり終わっていてガッカリしていた。尤も、私の目的は“もう一度ゴッホ美術館に行きたい”だったので、満足して帰って来たが、そのやり直しみたいな感じがした。それはそれでいいのだが、これを書いている4月の中旬に、何かにつけ母を思い出す事が多く、何なんだろうと思っていた。数日が過ぎた9日になって、ハッと母の誕生日だったことに気がついた。丁度100歳の誕生日だった。その数日前に3回忌の法事を済ませたばかりでそれも相まって、3日4日思い出していた謎が解けた。150cmあるかないかの小柄の割に身体の丈夫なひとで、私たち4人を育ててくれた。生命を失くすとその魂は何処に行くのか知らない。知らないがちゃんとこうして帰って来る場所を見ると、やっぱり消えて無くなるのではなくて、何処かに散らばっていて、何かの拍子に凝縮して集まるのかもしれない。

巷では、そんな事を無視して値上合戦みたいになって来た。猫も杓子も、全体で良くなって行こうとするより、我が良くなりたいたいと思うものなのか。こうしてスーパーマーケット業態に商品を供給する仕事をしていると、隆盛していく企業もあり、衰退していく企業もある。食糧品を扱っていると、景気に関わらず需要はあるはずだと、本屋の息子として考えていたが、どうもそういう事ではなく、需要は生きものとして動いているのかなと思う。『それ、スーパーで買ったのでしょうか』と昭和では言われていた。百貨店の包装紙がステータスの様な時代だった。ところが、昨今百貨店は衰退していくばかりで、逆にスーパーマーケットに集客等を頼る時代になったようだ。知っているだけでも、梅田大丸から声が掛かる企業もあれば、クィーンズ伊勢丹から提携の声が掛かる企業もある。少し考えてみた。どこが違うのか。今後考えが進めば更に新たな要素が出て来る可能性はあるが、今思いつくのは客との距離感なのかもしれない。客が遣って来る価値観から、客に寄り添う価値観が今の時代は受けるのかな。この原稿を書いている今は、高知から伊丹までの飛行機が、使用機材の不備が理由で2時間30分も遅れている。カウンターに行くと『申し訳ございません』としか言われぬ。謝ってもらいにわざわざカウンターまで行っている訳ではない。諦めて戻り携帯電話をいじると、何と別な交通手段を採択すればその料金の保証、そのまま大人しく待つとお詫び金が出ると書いたメールが届いていた。やれやれと思い、もう一度カウンターに行くと別なスタッフが、その詫金を取得する方法を懇切丁寧に教えてくれて、一緒に操作までしてくれた。お爺さんになると良い事もある。もちろん先程のようにツケndonなお姉さんもいるが、同じ数だけ親身になってくれるお姉さんもいる。この間、何人もそうして助けてくれた。企業としての難しさは、この『人に依る』事を如何に統一するかにある。

こういう事に厭世的になっている訳では無いが、このところ外で過ごす時間が増えた。増えたというより、そうでなくては我を保てない状態に近い。外にいる事は良い事なのだが、少し病的な気がするほど外にいると我が廻り、その気のなかで歩いている道を確認しようとしているように思う。これはどうした事だろう。さまざまな困難に直面する機会が増えている事は確かだが、その困難を紐解くと、その人は、それが最善と思っている事に行き当たる。『人事を尽くして天命を待つ』という言葉が確かあったと思う。『なるようにしかならない』のような投げやりな話しではなく、亦殺してしまえでも、鳴くまで待つ訳でも、鳴かせてみせようって事でもない。何故ならこれはホトギスという対象があつての話で、そういうんじゃない。今月号のどこかに書いた、みんなで良くなるという話しで、ここに自分の時間を費やしている。だから外にいて気持ち良いで済ませられなくなっている。

この春は、殊の外生命の息吹が目染みて仕方がない。若いころ、ムソー株式会社という自然食品専門の卸会社の創業者が、その月刊誌の巻頭に文章を出しておられて、それを楽しみにしていた。ある年の初め、その内容が今は知らないが毎年正月に高校生がサッカーの全国大会をしていた。私も好きでよく観ていたが、その若者の生命が眩しいという事を書かれていた号があった。読んだとき、何故か違和感を感じ『この方は、亡くなるのではないか』と思った。岡田周三さんの事だが、この方の息子さんとも縁を感じたその後間もなく亡くなられた。孫の紀信君とも仲良くしていたが、今は少し疎遠になっている。共に時間をそんなに過ごした訳ではないが、私にとっては凄く身近な存在の三代というのか、とにかく教えられる事が多い存在であることは間違いない。で、この事があるので、生命の息吹を自分に対して訴えかけられて、しきりに自分が反応している事は、自らの命も消え始めているかと頭の隅で考えている。ところが、片方では1年間やめていた喫煙を復活させたりして、しばしクリーンな身体に戻ったかと思えば、また雑食的なところに逆戻り、そうすると清廉潔白とは対照的な俗っぽさも甦って来た。

いずれにしても、『みんなで良くなる』とは程遠い世界に向かって拍車が掛かり、物理的ではない金融経済から、金がものを語る物欲的な戦争経済へひた走っている。

いつだったかミラノへ旅行し、日帰りでフィレンツェに出かけた時、帰りの電車を駅で待つことになった。1時間余りも待たせようか。その間同じか私より少し若い夫婦が、駅のベンチでやはり電車を待っているようだった。そのベンチで、近くに腰かけていたが煙草を吸いたくなり、その場を離れて戻ってみると、その場所には男性が既に座っていた。我が奥さんの顔を見ると『仕方がなかったのよ』という顔をしている。そのやり取りに気づいたその夫婦は、ゆったり座っていたそのスペースを詰めて私が座れるスペースを黙って空けてくれた。それで私たち夫婦と4人が隣り合って座る事になった。礼を述べ、少し会話をする事になって、何処から来ているのかって聞かれたから、『日本』と応えると、二人は感動を伴う驚いた様子を共に見せた。私たちはその反応に驚いたが、ここから先は少し複雑な会話になりそうで、そこまでの共通言語が無かったから、4人は、気は通っているが黙したままその場にいた。紳士の方は大学教授のような風貌をしていた。だから日本人像を持っていたと思うが、私たち二人はその日本人には見えなかったのだろう。何となくわかる気がする。別に行儀の良い国の人のように暴れたいた訳では無いが、日本人はもう少しつつまじやかな大人しさをもっていると思っただろう。だけど、私たちはもっと自由闊達にその場に溶け込んで楽しんでた。それを、まともに日本人と分かると、彼らの日本人像がリアルなものになったと想像した。行儀は良いけど、大人しいだけでも無いなと思っただけなら、それは正解だろうと思う。

米軍が日本から撤退すれば、中国はチベットのよう日本を扱い、遠慮会釈なくこの世から消し去ろうとするのだろうか。みんなで良くなるとする文化・風習が薄まって行けば、それは中国に道を開ける事になり、やがては名実ともに日本は消えていくかもしれない。それではこの惑星は規範を無くす事になると思うが・・・

有限会社アルファー 吉田清一郎